

## 10) ツゲとイヌツゲ=柘植／黄楊と犬柘植

ツゲはツゲ科の常緑低木で関東以西の本州、四国、九州などの暖地、特に石灰岩地によく生える。幹は直立し高さ1~3mに達し、樹皮は灰白色または淡褐色である。葉は対生し長さは1.5~3cmの倒卵形で、表面には光沢がある。春、淡黄色の小花を小枝の葉腋に密に付ける。果実は楕円形の槲果で、熟すると黒紫色になる。和名の由来は葉が層をなして密生し、次々に着く様を「次ぐ」といい、これがツゲになったとする説、梅雨時に葉が黄色になるところから梅雨黄となり、これがツゲとなったとする説、ツヨキメギ(強目木)が変化したとする説などがある。別称としてイヌツゲに対しホンツゲとか、伊勢神宮近くにある朝熊山(アサマヤマ)に因んで、アサマツゲとか、ベンテンツゲのほか、ウツギとかイボタなどと呼ぶ地方もある。学名は『*Buxus microphylla*』で、属名はこの木で箱などを作るところから「buxus=箱」に由来し、種小辞は小さい葉のという意味である。イギリス名でも『common box tree』で、buxusは英語のboxの語源でもあり、中国名は『黄楊木』である。

『万葉集』には黄楊を謡った歌が6首見られ、そのうち5首が「黄楊の櫛」を謡い込んだもので、残りの1首は「黄楊の枕」について詠んだものである。

君なくはなそ身装(ミヨリ)はむ櫛笥(クシゲ)なる 黄楊の小櫛も取らむとも思はず  
という播磨娘子(ハリマノイラツコ)の歌が残されている。これは播磨の国守だった石川の君子が、任を終えて都へ帰るに際し、娘子が君子に送った歌といわれている。娘子の素性ははっきりとしないが、播磨の遊行女婦(アソビメ)であったと思われ、当時は遊女にもこんな中央官吏と対等に、歌を交換する者も少なくなかった。歌の意味は、「あなたがいなくなってしまうたら、どうしてお化粧などするでしょうか、櫛箱の櫛も取ろうともしないでしょう」というものである。黄楊枕の方はというと、

夕されば床の辺(へ)去らぬ黄楊枕(ツゲマクラ) 何しか汝(ナ)の主待ち難き  
という詠み人知らずの歌がある。黄楊枕は男が通ってくることを暗示するもので、この場合は、どうして男が通ってきてくれないのかと、枕と会話しているのである。このような黄楊枕に対する情感はその後も平安時代まで続き、『勅選和歌集』などの中に散見することができる。

ヨーロッパでツゲは、象牙などで象嵌された宝石小箱を作る材であったが、古代ローマ時代には特別な木とされ、棺と一緒にツゲの小枝を埋葬した。イングランド北部では葬儀の際に若いツゲの小枝を墓地に投げ入れる習慣が19世紀まで続いていた。このためヨーロッパでは葬式の木とされ、墓地に多く植えられている。

鹿児島県では娘が生まれるとツゲを植える習慣があり、嫁を探すならツゲの木を探せという言い伝えがある。ツゲの木が人の目に触れるほどになると、娘も年頃になっているというほどの意味であろうか。材は緻密で狂いの少ないところから、櫛や印材などのほかに、定規、楽器、将棋の駒などに用いられている。

一方イヌツゲはモチノキ科の常緑低木で、ツゲに形状は似ているものの違う仲間  
の植物と言うことになる。日本各地の山野に普通に見られ、樺太や韓国、台湾、  
中国にも分布する。しかし地方変異が極めて多く、本州の日本海側、北海道、千島、  
樺太などの多雪地帯では幹が地表を這うように伸びるハイイヌツゲが、四国、九州、  
伊豆諸島、中国大陸などの温暖地帯には葉が大きくて薄く、果柄の長いツクシイヌツゲ  
が、九州南部から沖縄、台湾などの亜熱帯には鋸歯が目立つシマイヌツゲがある。  
高さはツゲと同様2~3mほど、樹皮は灰褐色で、葉は楕円形か長楕円形で縁には細  
かい鋸歯がある。またツゲが対生するのに対してイヌツゲは互生し、この点がツゲ  
とは明白に異なる点である。葉は肉厚で硬く、径1.5~3cm、枝葉は密に良く繁り、  
刈り込みにも絶えるので、樹形を整えやすい。このため埼玉県川口市安行などでも  
ツゲと言えばイヌツゲのことで、庭園樹としての人気も高い。雌雄異株で雌雄両花  
とも径6~8mmほど、淡黄白色の花を6~7月ごろに付ける。秋には黒紫色に熟し、  
径8~10mmほどの球形の果実となる。和名の由来はツゲに似ているもののツゲでは  
ないという意味で、イヌは植物名に良く用いられるキツネやカラス、スズメなどと  
同様である。別称も多くツゲの他ヤマツゲ、クサツゲ、オオツゲ、ネジノキ、トリトマラズ、  
ダンゴバラなどがある。学名は『*Ilex crenata*』で、属名はセイヨウヒイラギの古名  
に由来し、種小辞は円鋸歯状のという意味である。イギリスでは『Japanese holly』、  
中国では『鑿子木』または『柞木』である。

イヌツゲの最大の特長は、とにかく何処からでも良く芽吹くことと、若枝はしなやか  
で曲げたり、誘引したりしやすいこと、さらに葉が小さく革質を帯びた点で、この  
ことが園芸的には大きなメリットになっている。と言うのはどんなに刈り込んでも  
失敗することがなく、針金やロープを使って、自在に形を作り上げてゆくことが出来る  
からである。植物園などではしばしば、ウマやゾウ、キリン、ライオンなどの動物の  
形を作り上げたり、ツルやニワトリなどの鳥の形に仕上げ、子供たちに喜ばれて  
いる。埼玉県深谷市花園あたりの園芸農家でも、そんな刈り込みを作っているところ  
が多く見られる。しかし通風が悪くなると、枯れこんでくることもあるので、こまめ  
に手入れをして通風に心がけることも大切である。

一方、公園などでは球形状に仕上げ、花壇の周辺にアクセントにして植えられ  
ているのをよく見かける。生垣風に仕上げ、通路との仕切りに用いたり、一般家庭  
では最近、生垣は減ってきているものの、都心部を離れると生垣としてもイヌツゲ  
を植えるところは極めて多い。庭木としても形を綺麗に整えて、イヌツゲや前述の  
ラカンマキで、門や玄関の入り口をつくる邸宅は日本の各地で多く見られる。また  
霊園などでもしばしば各墓地の入り口に植えて、球状に刈り込んで形を作っている。

イヌツゲの材は硬くツゲの代替として印鑑や細工物などに用いられる他、モチノキ  
科と特徴として、樹皮にはトリモチを含み、『青モチ』と称して利用されている。



ツゲの花芽、ツゲは寒さに弱く関東以北ではまず見ることは出来ない。関東でも一般的に見られるのは、大島や御蔵島などの伊豆諸島方面である(小石川植物園)。



イヌツゲの花。ツゲに代わって関東ではこのイヌツゲが植えられている(さいたま市緑区)。





イヌツゲの熟した果実。イヌツゲは日本の固有種で、ツゲのような銘木ではない。しかし刈り込みによく耐えるのと丈夫な木なので、生垣や墓地、公園などによく植えられる(京都市左京区)。



イヌツゲで山の連なりを表現した植え込み(東京都千代田区日比谷公園)。





綺麗に刈り込まれて、ワンちゃんになったイヌツゲの木。こんな芸当が出来るのもイヌツゲならではの  
特徴である。犬だって象だって何でも変身するぞと、いわんばかりである(埼玉県深谷市)。



ゾウさんに変身したイヌツゲ。見事な変身ぶりである(埼玉県深谷市)。



ちょっと足が太すぎるけどキリンさんである(埼玉県深谷市)。



こちらはトナカイだろうか。すべて同じ園芸店で育てられていた(埼玉県深谷市)。





こんな鉢植えの可愛らしいウサギさんもいた(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)